



フ  
ィ  
パ  
リ  
ピ  
ブ  
ン  
に  
て

# TORU SAGA

When I Talk With Yumi

佐賀 通

A KAGEFUMI  
SCIENCE FICTION SERIES



[A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES]

# フィリピンパブにて

佐賀 通

*When I talk with Yumi*

by  
Toru SAGA 2016

cover illustration

by  
Masaki TSU

cover design and art direction

by  
Matthew A. KEITH  
(t. m. production)

フィリピンパブにて



華やかな場所、と言っているのかどうかはわからないけれど、とりあえず周りは暗く、ライトは光り、店内は男女で溢れている場所、フィリピンパブに僕は来ていた。

「3名様でいらっしやいますね？」

男性の店員が僕たちに問いかける。

「そうそう、3人。3人だから早く席に連れて行ってよ」

僕を連れてきた木瀬さんは店員さんにそれだけ言うと言員さんが案内しようとするよりも先にスタスタと店の中の空いたテーブルへと進んでいく。席に座ると木瀬さんは

「決まっているやろ。アイカや」

そんなことを後から来た店員さんに告げる。自由奔放で確かに僕の性格からしたら一緒に

いるのはちよつと怖いと思つてしまうような人なのだが、僕としては木瀬さんはこの店の常連であり、もうすでに何回か来ているのにいまだにこういう場所に来ることが慣れない僕にとって、木瀬さんは割と救世主のような人物なのだった。

「ありがとうございます。木瀬さん」

僕はとりあえずお礼を言う。今日も僕は木瀬さんに連れてきてもらっていた。木瀬さんに連れてきてもらうのは何度目になるかはわからないけれども、それでもこうして連れてきてもらえることには感謝している。店員さんから、指名の女の子はいますか？ と聞かれる。

僕も木瀬さんと同様、いつも指名する女の子、ユミちゃんの名前を告げる。少し待つと

「おー、コウスケーー！ アリガトー！」

と言いながらユミちゃんが来る。そしてユミちゃんは僕の隣の席につく。

「マタ、ヨンデクレテ、ウレシイ」

そう言つて笑つて僕をハグするユミちゃん。僕がいつも指名するパブ嬢のユミちゃん。どうやらまだ日本に来てからは半年しか経っていないようだがそれでも日本語はうまいと思う。僕がそれこそ初めて来て、そして初めて隣に来たときは、ほぼジェスチャーのようなもので意思疎通を図ろうとしたものだった。

ユミちゃんがこうして隣にきて話を聞いてくれる。といつても僕から話すのは大抵、日本



の季節はどう？ ってことぐらいだ。それでも、楽しいとは思う。確かに楽しい。

運ばれてきて、そしてユミちゃんが注いでくれたビールを飲む。まあ、あまり美味しいビールではない。それでも2軒目というのものもあるし酔う分には十分だ。酔っているからこそできる会話というのものもある。

実際、僕なんかはシラフでお店に来たところで楽しめるとは思えない。

酔っているからこそパブ嬢と話せるのだと思うし、この雰囲気も楽しめるのだと思う。1時間飲み放題がついて4000円。大体相場通りだという。そうはいつでも僕は他の店に行つたこともないし、実際に他の店がどれだけのお金を払わなきゃいけないのかよくわかっていない。1日1時間で帰る予定ではあるのだが木瀬さんと、もうひとりの飲み仲間である林さんの機嫌によっては、2時間目に突入することもよくある。

2時間もフィリピンパブにいて、そして財布の中身を失うことに、翌日後悔するという流れが絶対なのだが、それでも雰囲気にもまれやすい僕の性格が災いしてかっぴいふたりと一緒に残ってしまう。そして悲しいことに大抵楽しんでしまうのだった。

いい感じに酔ってきたので、ユミちゃんとは少しずつ会話が盛り上がっていく。

「また来てくれた嬉しい」

由美ちゃんはそんなことを僕に言ってくれる。僕も会えて嬉しいと返す。

「日本は最近夏になったけどどう？」

と聞いてみる。ユミちゃんは

「ニホン暑い。外出ると暑い。とにかく暑い」

と返してくる。フィリピンも暑いらしいがどうやら日本は日本でまた違う暑さがあるようだ。ユミちゃんとの会話は単純な言葉で行われる。

会話して10分後、ユミちゃんは別の客に呼ばれたからといって席を外す。

ユミちゃんが席を外したあとに来た次の娘は、さつきと同じユミちゃんだった。

「呼んでくれて嬉しい」

ユミちゃんはそう言って僕の隣へと座る。さつきユミちゃんは僕の隣から離れたばかりではないのか？ そう思った僕はさつきユミちゃんが向かった客の方を見る。そこにユミちゃんは確かにいた。でも僕の隣にいるのもユミちゃんだ。

「また来てくれたんだね。嬉しい」

そんなことを僕に言ってくれる。僕も会えて嬉しいとユミちゃんに返す。酔っているからなのだろう。おかしい状況になっているのは間違いないが、どうでもよくなってくる。

僕とユミちゃんは会話を始める。もちろん最初の会話は季節の話題だ。

「日本は最近冬になったけどどう？」

僕はユミちゃんに尋ねる。

「日本は寒い。フィリピンはこんなに寒くない。日本の気候とはやっぱりちがう」

そんなことを返してくる。ユミちゃんとの会話は続く。

「フィリピンは年間を通してそんなに気温が低くなることはない。多分大多数の人がイメージするような南国っぽい場所だと思ってくればいいし、もちろん、雨もたくさん降る」

ユミちゃんからはそんなことを聞かされる。こんなに流暢に喋る娘だったのだろうか？ その時、店の中でひとときわ大きい音楽が流れ始める。

「ダンスショーの時間になったね」

僕はユミちゃんに確認する。フィリピンパブでは1時間ごとに1番前のステージでパブ嬢たちによるダンスショーが行われる。大体曲はサザンオールスターズや最近の女性歌手の音楽だ。ユミちゃんは「行ってくるね」というと僕の隣から離れステージへと向かう。

ステージには席から離れたパブ嬢たちが集まる。ステージ上にユミちゃんを見つげようとする。ユミちゃんはどこだろう。なぜかステージ上にユミちゃんを見つげることができない。さっき確かに僕の隣から離れてステージに向かっていたはずなのに。

音楽が終わるとステージ上のパブ嬢たちはそれぞれ席へと戻っていく。

そして僕の隣にはユミちゃんが来る。

「私のダンス。どうだった？」

彼女は僕にそんなことを聞いてくる。「すごく良かったよ」と僕は答える。

「本当に？」

彼女は僕に再度尋ねる。

なんで彼女はそんなことを聞いてくるんだろう。僕が彼女を見つけることができなかったことをまるで知っているようだ。そうは思ったもののユミちゃんは次に

「ありがとう」

とだけ言って微笑んだ。

「さて、帰るか」

木瀬さんが僕に声を掛ける。もう1時間たったのだろうか。あつという間に時間が来てしまった。楽しい時はすぐに時間がすぎるといふけれど、僕はやはりこの空間を楽しんでいるということなんだろう。

どれくらい頻度でフィリピンパブに行くのかというと大体月に1回程度ということになる。自分自身の給料ではもちろんそんな通い詰めるなんてことはできないし、ああいうのは一定間隔空いた感じで行くから楽しいのと思う。

そんなわけで僕はまた木瀬さんたちとフィリピンパブに来るのだった。今日も僕の隣には

ユミちゃんが座る。

「今日も来てくれてありがとう」

ユミちゃんはそう言っただけに笑いかけてくれる。

ユミちゃんとの会話、もちろん話題は季節の話題から入り、その後様々な話題について話す。最近仕事はどうだとか欲しいと思っっているもの、ユミちゃんからは最近はじめて食べた日本の料理を聞く。

それはなんこつの唐揚げだった。そしてユミちゃんはどうかやらかなり気に入ったらしく、結構頻繁に食べているとのことだった。

「今度差し入れに鶏なんこつ持ってこようか？」

と僕が言うとユミちゃんは喜んでくれた。それにしてもユミちゃんは日本語が上手くなっただと思う。

ユミちゃんはアルコールの話題になる。僕はビールしか頼まないわけだけど、ユミちゃんからはビールは苦手であるということ聞いた。

「康介はビールしか飲まないね。ビールが一番好きなの？」

と聞かれる。

「そうだね、今までビールなんてそんなに好きじゃなかったのに働き始めてからは特にビ―

ルが好きになった。もちろん他ののも好きだし飲めるけど一番酔いの感じとか、ずっと飲んでいられる持続性から言うとやっぱりビールが一番適しているんだと思う」

「酔いの持続性っていうのは？ どういうこと？」

「そうだな、他のは飲んだら飲んだ分だけ酔うし、最後の方なんかは完全に悪酔い状態になる。けどビールっていうのはそんなことなく、ずっと飲んでてもいい感じのほろ酔い気分が続くってこと」

「そんなもんなのかしら」

「そんなものなんだよ」

ユミちゃんはビールが苦手であり、そして甘いカクテルが好きらしい。

それにしても今日はユミちゃんが中々席から離れない。ユミちゃんは割と人気があらし、僕がここにいる間、絶対2、3回は別の客のところへ行き順繰りに回っている。そのはずなのだが、と不思議に思い、ふと周りを見回すと他に誰も客がいないことに気づく。他の客どころか僕と一緒に来た木瀬さんもいつの間にかいなくなっている。

他のパブ嬢もいない。なぜか広いお店には僕とユミちゃんの2人きりだけとなっている。

「他の人はどこに行ったの？」

僕はユミちゃんに尋ねる。

「何を言っているの？ 他の人なんて最初からどこにもいないわ」

ユミちゃんこそ何を言っているのだろう。ここにはもつと人がいたはずだ。

「もうそろそろ、ダンスの時間だわ」

そう言うユミちゃんは僕の隣の席をたち、ステージに向かう。するとなぜかステージには他のパブ嬢たちがいる。そしてユミちゃんはまたしてもいない。

一体これはどういうことなのだろうと思う。目の前で行われるダンスを見続ける。他に客はいない。自分だけが独占できるダンスというのはラッキーなように思えて実際そんなに嬉しくない。そのショー自体が楽しいかどうかと言われるとこれが実際微妙な感じだというのが僕個人の意見だ。音は大きいし踊りがうまいかと言われると上手い人はうまいけど全員が決してうまいわけではない。

今回もユミちゃんの踊りを見ることはできなかった。まあ、ユミちゃんのダンスを見たいかと言われたら実際そこまで見たいとは思わない。

それにしてもなんか今日のダンスはおかしいような気がする。流れている音楽はなんだろう。いつも流れている日本の音楽ではないのは確かだ。フィリピンの歌？ そうだとしてもなぜ急にこの歌になるのだろう。

音楽が終わり、ダンスが終わった。彼女が戻って僕の隣に座る。そして、向かいの席の木

瀬さんが僕をからかい始める。

「康介、ずっとユミちゃん見とったな、そんなに一生懸命見てどないするんや」

と言つて大きく笑う。いつの間にか店はいつも通りであり、大いに賑わっている。どうしてさっきまでは誰もいなかったんだろう。なんだか、狐につままれたような気分だ。

「狐につままれたような気分だつて思っているんでしょ？」

とユミちゃんは僕に聞いてくる。なんで僕が思っていることが分かるんだろう。

「以心伝心っていうのはまさにこのことじゃないかしら」

そうなのかなあ、と僕は思う。

「なんで僕が狐につままれたような気分がする、つて思つたの？」

と聞いてみる。あれ、僕はなんで狐につままれたような気分になつたのだけ？ とその

時僕の中に疑問が沸き起こる。何もおかしいなことは起こっていないのに。

「なんで康介が狐につままれたような気分になつているか教えようか？」

それに対して僕はこう答える。

「いや、別にいいよ」

そうして僕は今日も木瀬さんたちとお金を払つて帰る。また来てね。ユミちゃんからはそう言われて嬉しく思う。



それにしてもなんかここに来ると不思議な体験をしているような気がする。ユミちゃんがユミちゃんじゃないような。なぜだろう、ずっと木瀬さんや林さんたちとも一緒に話しながら飲んでいるはずなのに。

そう言いながらも僕はまたフィリピンパブに来る。違う。なぜかいつの間にかいる。いつの間には僕はここに来たのだろう。

周りを見渡すといつものあの店だ。隣にはいつの間にかユミちゃんが座っている。一体どうしてこんな場所にいるんだろう。

「こんな場所なんてひどいこと言わないでよ」

ユミちゃんは僕に向かって怒ったような口調でそんなことを言ってくる。ごめんね、僕はひと言だけそう言うのとビールを頼む。なんで僕がここにいるのだろうという考えはなくなっていく。

「今日はビンゴ大会なの」

ユミちゃんは僕にそう教えてくれる。ビンゴ大会って？ 僕がそう尋ねるとユミちゃんは教えてくれた。

「ビンゴカードを買ってくれば参加できるわよ。1枚1000円。景品も豪華だからぜひ参加してね」

なるほど、普通によくあるビンゴゲームか。なんて思っているとその時木瀬さんが

「あれだぞ、康介。自分の分だけじゃなくユミちゃんの分も買ってあげないといけないぞ」

と言つてガツハツハと笑う。そうなのか、と思ひ、僕は自分の分とユミちゃんの分の2枚を買う。そしてビンゴゲームが始まる。

次々と読み上げられていく番号。意外と僕の持っているビンゴカードの番号が当たり、僕のビンゴカードには次々と穴があげられていく。そしてそのうちにビンゴができた人から手を挙げていく。当たった人はステージに上がりステージ上にある景品から自分が気に入ったものを選んでいく。そしてなんと僕のビンゴがそろってしまった。その時、木瀬さんがユミちゃんに質問をする。

「なあ、ユミちゃん。今ステージにある景品の中から何が欲しい？」

「私はホットプレートかな。ホットプレートが欲しい」

と答える。

「おい、聞いたか。康介。ユミちゃんはホットプレートが欲しいらしいぞ。聞いたか、康介、ユミちゃんはホットプレートが欲しいらしいぞ」

と2回言ってくる。ステージに上がる僕。何が欲しいですか？ ステージにいる司会から聞かれる僕。僕は答える。

「ホットプレートでお願いします」

店員からホットプレートを手渡される僕。席に戻ると僕はそのホットプレートをユミちゃんに渡す。ありがとう、と微笑むユミちゃん。

「おい、康介！ ユミちゃんのおっぱい揉ませてもらえー！」

笑う木瀬さん。

「いいよ、康介。はい」

僕はユミちゃんの胸に手を伸ばす。ユミちゃんの胸に手を伸ばしユミちゃんの胸を服の上から揉む。揉むといってもなんか触っているだけのような感じだ。全然胸を揉んでる感じがしない。

翌日に朝からテレビアニメを見る。その朝からやっているアニメでは世界を滅ぼそうとする存在を、少女たちが変身して、そして戦うことで世界を守るアニメだ。

彼女たちはただひたすらに自分が住むこの世界を守ろうとする。そしてそれは自分のためだけじゃなく自分の住む世界の人々のためでもある。彼女たちはそれこそ世界を守るために頑張る。

彼女たちはなんだろう。頑張っている。人々のために頑張っている。それに比べると自分は何をしていたんだろうと思う。一体、昨日の自分は何をしていたんだろうと思う。

別にそれは悪いことではないはずだ。人間1人ひとりが全員のために何かできると思ったらそれはそれで違うような気がする。

だから、相変わらず僕はフィリピンプブに行く。行かないやいけないような気がする。林さんからは

「すつかりハマっちゃたなあ。康介」

なんて言われているけどなんというかもハマっているのかそんな感じの気がしない。気づいたらいるのだ。ここに、フィリピンプブに。

「それはやっぱりハマっているということじゃないの？」

ユミちゃんからもそんなことを言われる。お店側の立場として「ハマっている」とかそんなことを言ってしまうといいのだろうかと思うのだけれど、これも気心のしれた仲になれた証だと思ふことにして僕は「そうだね、ハマっているんだらうね」と言っておくことにする。

「この前のホットプレートありがとう」

ユミちゃんからはお礼を言われる。いいんだよ、それくらい。なんて返してると

「何をかっこつけてるんや、康介は」

と言って茶化される。ホットプレートで何を焼くのだろう。そういえばユミちゃんは焼肉が好きだと聞いたことがある。やっぱり自分の家で焼肉をするんだらうか……。でも家で焼

肉をするのって大変だよなって思う。

「家で焼肉はさすがにできないよ」

ユミちゃんからはそう返される。なんでできないの？ と聞くと

「だって焼肉お金かかるじゃない」

と言われる。確かにその通りだ。片付けも部屋の臭いも大変だし。じゃあ一体何を作るの、と聞くと

「お好み焼き」

とだけ返される。お好み焼きなんて作って食べるんだ。意外に思ってた聞いてみると

「お好み焼きは美味しいからね」

そう返される、確かに美味しいと思う。それでもお好み焼きを作るんだ……という意外さが残る。

「そんなに意外と思ってもらったら困るのだけど」

ユミちゃんからはそんなことを言われてしまった。

「安心して、ちゃんと使ってるから」

そんなことまで言われてしまう。そこまで言わせるなんて、そんなに僕は信用ないのかなあとも思う。信用あるなしの話ではないのかもしれないけれども。

ビールが僕のもとへ運ばれてくる。コップにビールをついでもらいまた飲み始める。

「何か料理たのもうや」

木瀬さんはそう言うのと木瀬さんの隣にいたパブ嬢に「何が食べたい？」と聞く。店員を呼んで注文をする木瀬さん。少し経ったら注文した料理が運ばれてくる。なぜかその料理は2皿も運ばれてきており、そのうち1皿は僕とユミちゃんの前に置かれる。食べようよ、とユミちゃんから提案される僕。そんなわけで食べてみる僕、なんだか豚の角煮っぽい料理だった。

今日も1番前のステージではダンスショーが行われる。パブ嬢たちはステージ上に集まるとダンスを始める。今日はユミちゃんが踊っている。毎回来ていて、毎回ダンスショーを見ているはずなのだがなぜかユミちゃんの踊りを見るのは初めてな気がする。毎回ユミちゃん は確かに踊っているはずなのに、僕は毎回それを見ているはずなのに、

「どうだった、私の踊り？」

そんなことをユミちゃんからは聞かれるのだけどそれに対してはいつも通り「良かったよ」のひと言だけ返すことしかできないでいる。もっと何か気の利いたことを言うべきなのだろうか？

「何かもつと気の利いたことを言わんと、康介ー！」

と木瀬さんからはそんなことを言われる。もっと気の利いたことを言うべきのようだ。

「いいよ、別に気の利いたことなんて言わなくて、そういうの考えて答えるの、康介はなんかないさそうない気がするし」

なんてことを言われてしまった。これはこれで言われるのはなんか良くない気がする。どうにも傷つく。というかやはりお店側のユミちゃんがそんなことを客側である僕に向かってそんなことを言ってもいいのだろうか。まあでも、言われるのは仕方ないことだし、僕がそういうことを言われても特に気にしないような人間であることを向こうはもうわかっているだろう。

「言われてばっかしやないか、康介」

と聞いてまた木瀬さんははっはっはと笑う。

いいんですよ、僕はこのままで。なんてことを思ったりする。

「まあ、そうだな。康介、お前はそのままでもいいと思うよ」

そう言っただけ木瀬さんはやっぱりはっはっはと笑う、このままでいい、そう言ってもらえるのはやっぱり嬉しいことだと思う。

「たったこれだけで嬉しいなんて単純な奴やなあ。康介は」

そう言っただけ木瀬さんはまたはっはっはと笑う、木瀬さんは一生懸命笑ったところで、そろ

そろ帰ろうと提案する。

「もう帰るの？ 早くない？ もうちよつといよろよ」

なんてことを言ってくるのだけどなんだかそれだけでは客を引きとめようとするお店側の主張にしか過ぎないような気がしてすぐに帰る気しなくなってくる、

「そんな冷静っぽいこといなよ」

木瀬さんは僕に向かってそう言った。今、僕は帰る気しななことを口に出してしまったのだろうか。

「いいじゃない、今日はこれでもう帰るんでしょ？ また来てくれれば私はそれでいいよ」  
なんてことを言ってくれる。

そう言ってくれることが嬉しい。ありがとう、また来るよ。そう言う僕はお店を出て帰る。またある日、フィリピン・パプに行く、ユミちゃんは休みの日だった。

「キョウハ、ユミはヤスミ」

そんなことを言いながらユミちゃんではない別の女の子が僕の隣の席につく。

「いやまあそんな日もあるよね」

そう言いながら僕はビールを飲む。

「ユミがいないと寂しい？」



そんなことを隣の女の子は聞いてくる。確かにちよつとは寂しい。でもここで本当に寂しいなんて言ったら隣にいる女の子に悪い気がするし、それに、たった1日いいぐらいでそんなに落ち込むほど寂しいとは実際思わない。

「いいんだよ。寂しいなら寂しいって言っても」

そんなことを隣の女の子は言ってくる。たった1回いいぐらいなのだ、それぐらい別に本気で悲しむようなことじゃない。

「そんなこと言ったらユミに怒られちゃうよ」

1回いなかったことを寂しからなただけで、そんなに怒られるようなことなんだろうか。

「いや、別にそんなに怒られるようなことではないで……」

木瀬さんはビールを飲みながらそんなことを言ってきた。

まあ、そうだろうな。別に1回ぐらいいいなくてもそんなに困ったことにはならないよな。

「じゃあ、今日はユミはいない日だけど楽しんでね」

隣の女の子はそう言ってくれる。ユミちゃんがないパブだけど、それでも楽しい。目の前で行われるダンス。ビールを飲みながら僕は隣の女の子と話す。女の子は僕に質問してくる。

「コウスケは、好きな食べ物とかあるの？」

もちろん、と答える。何が好きなの？ と続けて質問されたので、ハンバーグと答える。ハンバーグと答えを聞いた女の子はどうして僕にハンバーグが好きなかを聞いてくる。

好きな料理がどうして好きなかを答えるというのは中々難しく、まあ、単にお肉が好きだからというのとそのあとの味付けの感じが好きみたいな曖昧な答えを返す。

「いいよね、ハンバーグ。私も好き。コウスケが持つてくる。なんこつの唐揚げも好きだよ」そんなことを隣の女の子は言ってくる。なんこつの唐揚げ？ そしてこの声は、と不思議に思つて隣を見るとそこにはユミちゃんがいた。なんでと思い。ユミちゃんにどうしてここにいるのか聞いてみる。

「私は最初からここにいたよ？ どうしてそんなことを聞くの？ 私がここにいちやダメ？」なんてことを言ってくる。なんか向こうもこちらが急に聞いてきた質問に戸惑っているらしく、どうやら本当にユミちゃんの中では最初から、ユミちゃん自身は僕の隣に座っていたということになるようだ。

「会えて嬉しい」

とぼそつと僕が呟くと、

「変な康介、なぜそれをわざわざ今言うの？」

と首を傾げられてしまった。まあ、ユミちゃんからしたらそうなのだろう。でもこうしてユミちゃんが僕の隣に来てくれたことはうれしいことだし、僕はこうしてまたいつもどおりの状況を取り戻す。

「良かったな、康介。また隣にユミちゃんが来てくれて」

そんなことを木瀬さんは言ってきた。木瀬さんは最初僕の隣にいた娘がユミちゃんじゃないことを認識しているのだろうか……。

「いやあ、すまんすまん。そうだな、お前の隣は最初からユミちゃんだったよ」

そんなことを言い始める木瀬さん。一体なんでそんなことを言い始めるんですか？ と聞いたところ、いやあ、深い意味はないよ。とだけ返されてしまう。

含みがあるようなないようなよくわからない言い方だったりもするのだけれど、なんだかはぐらかされた感否めない。

「どうしたの？ 急になんか変にそわそわし始めて？」

いやなんだか、狐につままれたようなそんな変な感じがして、と思っている

「狐につままれたような感じだと思って思っているんでしょ？」

そんなことをユミちゃんから言われてしまった。

以心伝心、というものなのだろうか？ なんだか以前もこんなことがあったような気がする

る。

怖い感じはしない。まあ、不思議な感じがするなというだけだ。なんだかこのフィリピンのパブに来てからというもの、不思議な出来事にあっているようなあっていないような気がする。

「今日も来てくれてありがとう」

そんなことをユミちゃんが言ってくる。そういえばどれくらい時間がたったのだろう。なんだかずっといたような気がする。いくら払うことになるんだろう。あれ、そういえば僕は最近ここでどれだけお金を払ったんだろう。前回はお金を払ったんだろうか？ 払ったような払ってないような……。

「ずっとお金はもらっているわよ」

そんなことをユミちゃんは言ってくる。どれだけお金を払ったんだっけ？ と聞いたがそれに対しては笑うだけでなぜか答えを返してはくれない。

自分の財布からお金がどれだけ消えているかなんてそれぐらいわかるようなものなのになぜだか自分の最近の財布にどれだけお金が入っていたか、どれだけ消えているのかを全く思い出せないことに気づく。

「まあ、ええやんか。早く帰ろう」

そんなことを言ってくる木瀬さん。そして僕はお金を払ってお店を出たはずだった。

気がつくとき、やはりフィリピンパブにいる。なんでフィリピンパブにいるんだろう？ そんな疑問もユミちゃんが隣の席に来ると全てがどうでも良くなってくる。

「それで？ 今の季節は何？」

とユミちゃんは聞いてくる。そうだな、今の季節は多分夏なんだと思う。夏に好きな食べ物は何？ と聞かれたので、そうめん、とだけ答える。ふと考えてみれば夏にしか食べないものなんか僕にとってはそれぐらいしかない。

「まあ、今は冬なんだけどね」

ユミちゃんは僕に向かってそんなことを言ってくる。そうだった。たしかに今は冬なのだった。季節の話はユミちゃんとする。そして僕は家に帰る。

そして次の日もフィリピンパブに行こうとする。指名をするのはもちろんユミちゃんだ。そうすると店員さんから

「ユミは既に別のお店へと異動しておりますが……」

と告げられてしまう。一体いつ？ と聞くと

「もう半年も前になります」

と返ってきた。僕は、一体いつごろ来ていたのか？僕は昨日もここにいてユミちゃんを

話していた気がするはずなのに。

僕が今まで来ていたのは本当にここで、そして話していた彼女は、本当にここにいたユミちゃんだったのだろうか？